［シンポジウム2］

江戸後期の福山藩と考証医学
――伊澤蘭軒とその学統――

町　泉寿郎
二松学舎大学文学部

はじめに

備後福山藩は1710年以来，幕末まで譜代の阿部家10万石が領した．水野忠邦の後の老中で，ペリー来航時の政局担当者として知られる11代正弘（1819～57）は，藩政では開明的な名君として知られ，幕政においても講武所・海軍伝習所・洋学所などの洋学導入に努めている．その一方で，森鷗外がその晩年の史伝で克明に描いた伊澤蘭軒をはじめとする江戸後期の考証医学者のなかには，福山藩医が数多く見出されることから，漢方古典の考証学は福山藩医学の一特徴となっていたようにも見える．問題は，鷗外作品を含めて，従来の研究蓄積が洋学系の学統と漢学系の学統の相互がどのような関係にあったかについて，殆ど言及してこなかった点である．小論の目的は，江戸後期の福山藩の学問全体の形成と展開を見渡しながら，福山藩の医学を特に考証医学と洋方・洋学の関係について着目することを通して，近代医学前夜の諸相を整理しようとするものである．

福山の藩学

17世紀には山崎闇斎門に永田養庵・佐藤直方が出ている．その後，18世紀には伊藤梅宇（1683～1745，仁斎次男，重蔵）が招聘され，以後，藩儒として歴代継承したほか，山室如斎（1739～1810，林東溟・亀井南冥門）ら古学系の学者が出た．学校組織としては1786年に藩校弘道館が作られると山室如斎が初代総纏となり，当初は太田全斎（1759～1829，山本北山門）のごとき折衷学者も学を講じた．その後，廉塾主で詩名の高い菅茶山（1748～1827）が登用され，菅茶山や頼山陽の学統（北条霞亭・門田朴斎・関藤藤陰・江木鰐水ら）がこれに加わり，幕末の藩政改革に影響力を持った．那波魯堂に学び，西山拙斎・頼春水と交流した菅茶山の儒学は朱子学に属しており，茶山の登用には学問所直轄化にともなう幕府の朱子学尊重への配慮が推測される．1854年には先に設けられた弘道館や練兵場（1846）等を併せて誠之館を開設し，漢学・国学（大国隆正を招聘）・兵学・洋学・医学を講じた．

福山藩の医学

1797年に藩医の家督相続時に勧学を令しているのは，松平定信の施策に倣ったものか．弘道館時代，初期には儒医鈴木圭斎（1772～1834）が講学し，蘭方では坂上朴安が先鞭をつけ，寺地強平（1809～75）・五十川周圭（1818～45）が江戸の坪井塾に学んで蘭方を伝え，一時，長崎から登用された杉純造（1828～1917，亨二）が英学を講じた．誠之館時代の学生から小林義直（1844～1905，大学東校大助教）や清水郁太郎（1857～85，東大産婦人科初代教授）が出ており，明治2・3年に医学校・兼病院が開設されて洋方による教育に転換．蘭方・蘭学導入が目立つ一方，誠之館内に置かれた医学所は漢方を中心に講じたとされる．これとは別に，江戸丸山の藩中屋敷（文京区西片，現誠之小学校）に1818年に文武場が開設され，1853年に改組されて誠之館となった．『日本教育史資料』弐によれば，福山藩校では8～14歳の藩士子弟に対する就学内容や，三段階の考試科目等が定められていた．医学に関しては，福山と江戸藩邸の藩校との間に教育内容の大差は認められず，初段では金匱要略・傷寒論・神農本草経・難経・諸病源候論・素問・霊枢，外科には外科正宗，鍼科には十四経発揮の素読を課した．二段では

温疫論標注の講義・考試を，三段では傷寒論輯義の講義・考試を課した．二段の課本は，黒弘休伯注『温疫論標注』（1801年刊）の可能性を残しつつも，同じく標注形式をとる1803年多紀元簡序刊『瘟疫論類編』の可能性も捨てきれないと思う．三段の課本『傷寒論輯義』は1822年刊の多紀元簡の遺著のことで，江戸医学館でも基本テキストとして使用された．多紀氏の著作を課本としたとする推定が正しければ，福山藩校における医学教育に江戸医学館の考証医学の学問的影響が認められると言えそうである．

藩医伊澤家とその学統

○伊澤信階（1744～1807）藩医初代，幕府医官武田叔安門．『孝経』を重んずる志操正しい人物．
○伊澤蘭軒（1777～1829）2代，目黒道琢・武田叔安・太田澄元門，収書に富み門人を輩出．
○伊澤榛軒（1804～52）3代，辻元崧庵・多紀元堅・田村元雄門，1843医学館講師，1847御目見．
○伊澤棠軒（1834～75）4代，鳥取藩医田中氏の男，1863福山誠之館医学講師，戊辰戦争従軍．
○伊澤柏軒（1810～63）分家初代，辻元崧庵・多紀元堅門，医学館講師，1857御目見．京都客死．
○伊澤信平（1861～1923）柏軒三男，黒田藩口科医の伊澤宗家を相続，東大医学部卒，歯科医．
○森立之（1807～85）蘭軒門，考証医学を集大成，『経籍訪古志』，本草経・素問・傷寒論『攷注』．
○森約之（1835～71）立之の嗣子，妻は大槻玄沢の孫女，福山賢忠寺に葬る．

伊澤家は富商で考証学者の狩谷棭斎とも縁戚で，この一派に属する儒者・松崎慊堂等と親交があった．棭斎・慊堂の古典解釈学に対する評価は現在も高く，その点では伊澤蘭軒・森立之の医学古典研究に対しても同様な評価がなされてしかるべきである．蘭学・洋学の流入によって，従来の漢方医学の専門分科化が促進されていく際に，考証医学は単に幕藩体制下における旧弊な孤塁として存続したのではなく，西洋の学術に対置しうる科学的・合理的な研究教育として刷新されていったと見るべきではないか．対象となる書籍が漢方医書から西洋医書に変わったため，考証医学者の研究成果は顧みられなくなっていったが，その古典学がもつ合理精神や科学性は再認識されるべきである．